

れる。扁平な両端部には未成熟な生殖細胞を容れる生殖器官が並んでいる。表面は吸収上皮の役割を果たす外皮層で覆われ、内側を平滑筋束が走っている。消化管はない。

島根医大環境保健医学の山根洋右教授は北欧産サケから取り出した広節裂頭条虫のプレロセルコイドを自ら飲んで日本産サケのそれと比較した。北欧産幼虫ではひどい下痢と貧血に苦しんだが、日本産では無症状だった。これは、上述したマンソン孤虫の場合と逆の「やせ因子」の例として興味深い。1世紀ほど前の西欧で、広節裂頭条虫のプレロセルコイドがやせ薬として使われた歴史が残っているそうだ。

4. 小形条虫症 *hymenolepiasis*

小形条虫 *Hymenolepis nana* はネズミの寄生虫で、全長1~2 cm、体幅は0.5~0.9 mm、体節数は約200である。ヒトへの寄生は小児にみられやすく、感染に中間宿主を必ずしも必要としない点が特徴である。自家感染がありうる。腸管内で孵化した六鉤幼虫はまもなく腸絨毛内へ侵入し、尾部のない擬嚢尾虫 *cysticercoid* となる。その後、再び腸腔内へ移動して成虫となる。図4に、小腸に寄生する小形条虫の組織所見を示す。鉤を有する吸盤により腸粘膜に吸着しているようすがよくわかる。

小形条虫と同じ膜様条虫類に属する縮小条虫 *Hymeno-*

lepis diminuta は、全長2~6 cm、体幅3.5 mmのネズミの寄生虫である。昆虫が中間宿主である。ヒトへの感染は、擬嚢尾虫を有する昆虫の摂取による。穀類につく昆虫(メイガ、ゴミムシダマシ等)が感染源となる。

5. イヌ条虫症(瓜実条虫症) *dipylidiosis*

イヌ条虫、別名瓜実条虫 *Dipylidium caninum* はイヌを終宿主とする条虫で、ネコにも感染する。まれに人体寄生例(多くは小児)が報告されている。幅1.5~3.0 mm、長さ15~35 cmであり、後半部の成熟体節は比較的厚く、節間の連鎖部が狭小なため瓜実型を呈す。イヌノミおよびネコノミが中間宿主となる。小腸に寄生する。感染動物の肛門周囲や毛に付着している虫卵をノミの幼虫が摂食し、体腔内の擬嚢尾虫が形成される。終宿主はノミを咬んで経口感染する。図5、6に、イヌから排出されたイヌ条虫の肉眼所見および組織所見を提示する。

参考文献

- 1) 赤尾信明, 藤田絏一郎: 条虫症. 臨床と微生物 1996, 23: 161-165
- 2) 藤田絏一郎: 女子高生, 今どきのダイエット. 治療 1998, 80: 62-67
- 3) 高岡宏行: 昆虫による病原体伝播のしくみ. 医昆虫学をはじめて学人のために. 南山堂, 東京, 1997

■ネコ条虫幼虫感染ラットにおけるメネトリエ病様胃粘膜肥厚

ネコ条虫 *Taenia taeniaeformis* の囊虫(幼虫)が肝に濃厚感染したラット(中間宿主)には、胃液pHの上昇とともに、高ガストリン血症とメネトリエ病様の著しい胃粘膜肥厚が観察される。胃粘膜は正常の5倍程度まで肥厚し、組織学的に、胃腺の萎縮、被覆上皮の過形成、腺管の嚢胞性変化を認める。軽度の感染ではこのような変化はみられない。

反芻動物の第四胃に *Ostertagia* や *Trichostrongylus* といった幼線虫が感染した場合も、胃液pHの上昇を

伴った高ガストリン血症と胃粘膜の肥厚が生じると報告されている。

これらは、マンソン孤虫による成長ホルモン様物質の分泌とともに、独特の対宿主作用として注目される。

参考文献

- 1) 奥祐三郎, 今野兼次郎: 寄生虫感染における胃の肥大と高ガストリン血症. とくに猫条虫感染ラットに関して. 医学のあゆみ 1997, 181: 1098-1101